

特別セッション「安全保障と天文学」 天文学研究者としてのコメント

海部宣男

1949年の日本学術会議声明と科学者の責任

日本の科学者が携わった戦事研究

「戦争観」の変化

「学問の自由」と今の日本

日本学術会議発足時の「声明」と科学者の責任(1)

1-1

昭和24年1月22日

日本学術会議第1回総会

日本学術会議の発足にあたって科学者としての決意表明（声明）

われわれは、ここに人文科学及び自然科学のあらゆる分野にわたる全国の科学者のうちから選ばれた会員をもつて組織する日本学術会議の成立を公表することができるのをよろこぶ。そしてこの機会に、われわれは、これまでわが国の科学者がとりきつた態度について強く反省し、 今後は、科学が文化国家ないし平和国家の基礎であるという確信の下に、わが国の平和的復興と人類の福祉増進のために貢献せんことを誓うものである。 そもそも本会議は、わが国の科学者の内外に対する代表機関として、科学の向上発達を図り、行政、産業及び国民生活に科学を反映浸透させることを目的とするものであつて、学問の全面にわたりそのになり責務は、まことに重大である。されば、われわれは、日本国憲法の保障する思想と良心の自由、学問の自由及び言論の自由を確保するとともに、科学者の総意の下に、人類の平和のためあまねく世界の学界と提携して学術の進歩に寄与するよう万全の努力を 傾注すべきことを期する。

ここに本会議の発足に当つてわれわれの決意を表明する次第である。

日本学術会議発足時の「声明」と科学者の責任(2)

- 日本学術会議発足時の第一回総会(1949年1月)で、
声明「科学者としての決意表明」が提案された
- 原案3行目「これまで・・・」の前に「戦時中」という言葉を入れる修正案： 議論の末、91対65(出席195)で否決
- 「戦時中への反省」を入れることに、特に医学系が「戦争下で国家命令には従わざるを得なかった」と反対
(『学者の杜の40年』福島要一著、日本評論社より)
- ◆ 原案は採択されたが、侵略や戦争への協力に対し、当時の科学者の多くがあやふやな心理だったことがわかる
- ◆ 日本の科学者の多くが、深く意識せずに侵略戦争の一端を担った。戦後、物理・人文などで反省が高まったが、多くの分野であいまいなままだった

【第二次世界大戦の主な経過】

- ・1910年 大日本帝国、大韓帝国を併合（「韓国併合条約」）
- ・1936年 関東軍防疫部（いわゆる731部隊）設置、生体実験
- ・1937年 7月 盧溝橋事件。日中戦争始まる
- ・1938年 5月 「国家総動員法」（「総動員試験研究令」含む）
- ・1939年 工学者大量養成計画の進行（名古屋帝国大学新設等）
- ・1939年 文部省科学研究費交付金300万円（配分学術研究会議）
- ・1941年 東大第二工学部新設、大学工学部卒は1945年で2倍に
- ・1941年 12月 真珠湾攻撃、開戦（日独伊一米・英・中・オランダ）
- ・1943年 ソロモン列島・ガダルカナル沖で大敗、日本敗勢明確に
- ・1944年 3月 東京大空襲、全国数十都市に爆撃
- ・1945年 8月6日 広島、9日長崎原爆投下
- ・1945年 8月 ソ連参戦、関東軍撤収、731部隊証拠隠滅
- ・1945年 8月14日 日本降伏、第二次世界大戦終結

『動員下に於ける重要研究課題』

文部省科学局 昭和19年度 ⑧

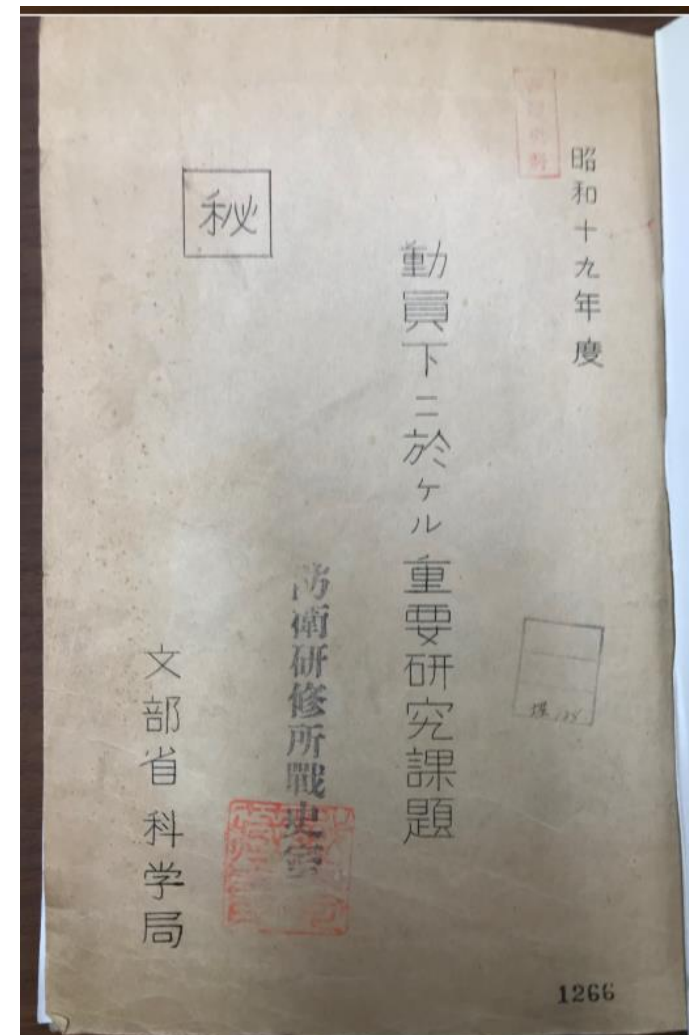
(防衛研修所戦史室の印あり、防衛研究所図書館蔵)

八	七	六	五	四	三	二	一	著者
動員如何	運用研究	現行軍事	遠征機動隊及機動ニ於ケル測光學的研究	精密測時法ノ研究	天文気象及天文測地法研究ノ整理	太陽放射、放射線及其作用	大口極光遠光線	名
東北大理	京大理	九大理	早大天文部	早大天文部	早大天文部	早大天文部	早大天文部	班
田思彦	田正彦	田正彦	田正彦	田正彦	田正彦	田正彦	田正彦	長
二八	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	全数
四	一	一	一	一	一	一	一	内外部
三三〇〇〇	三三〇〇〇	三三〇〇〇	三三〇〇〇	三三〇〇〇	三三〇〇〇	三三〇〇〇	三三〇〇〇	研究費

昭和十九年度學術研究會 戦時研究班及研究費一覽

（昭和十九年度文部省調査ニ依ル）

1098



写真資料は高橋慶太郎氏(熊本大)による

『動員下に於ける重要研究課題』

「昭和19年度科学研究会議研究班及研究者一覧」より

- | | |
|-----------------------|--------------|
| 1. 大口径比望遠鏡 | 関口鯉吉(東京天文台) |
| 2. 太陽輻射、放射線及其作用 | 萩原雄輔(東京天文台) |
| 3. 天測航法及天文測地法研究・改良 | 松隈健彦(東北大学) |
| 4. 精密測時法ノ研究 | 早乙女清房(東京天文台) |
| 5. 遠距離搜索及標定ニ於ケル測光学的研究 | 関口鯉吉 |

.....

- | | |
|----------------|------|
| 118. 南方海流の調査研究 | 関口鯉吉 |
|----------------|------|

.....

- | | |
|------------------|------|
| 122. 大氣中に於ケル光の屈折 | 関口鯉吉 |
|------------------|------|

.....

- | | |
|----------|------|
| 126. 宇宙線 | 玉木英彦 |
|----------|------|

- | | |
|----------|------|
| 127. 原子核 | 仁科芳雄 |
|----------|------|

ウランの分裂、同位元素分離、など

- | | |
|-----------|-------|
| 128. 素粒子論 | 朝永振一郎 |
|-----------|-------|

- | | |
|-----------|------|
| 129. 物理数学 | 伏見康治 |
|-----------|------|

戦時研究に携わった主な科学者（濃い青字は中心的組織者）

【天文学】

関口鯉吉、萩原雄輔、広瀬秀雄、鍋木政岐、中野二郎、
辻光之助、虎雄正久、藤田良雄、・・・（東京天文台）
荒木駿馬、宮本正太郎（京大宇宙物理）、松隈健彦（東北大）

【物理学】

仁科芳雄、菊池正士、湯川秀樹、玉木英彦、宮島忠興、
坂田正一、関戸弥太郎、武藤俊之助、湯川秀樹、朝永振一郎、
小谷正雄、山内恭彦、伏見康治、霜田光一、小田稔、・・・
（前記資料より）

【その他の分野】

電波伝搬	<u>前田憲一</u> （全般指導）
超短波基礎研究	<u>八木秀次</u> （全般）
真空管	<u>森本清吾</u> （真空管）
特殊気球	<u>藤原咲平</u> （全般指導）
凍害対策	<u>中谷宇吉郎</u>

（『近代日本の研究開発体制』 沢井実著、名古屋大学出版会より）

日本学術会議発足時の「声明」と科学者の責任(3)

- 日本は開戦前夜、科学での米欧からの遅れに気付き、38年、国民総動員の一環で「科学者総動員」へ
- 名古屋帝大、東大第二工学部の設置など技術者養成を急ぎ、工学分野に大量の研究費（工学の黄金時代）
- ほとんどの物理学者・天文学者も、レーダー、原爆などの新兵器開発に参加（結局、たいしたことはできず）
- 捕虜の生体実験を行った関東軍731部隊に関与した中枢医学者複数が、戦後初期の日本学術会議会員に
戸田正三（京大） 731部隊に学者多数を送り込む
石川太刀雄丸（京大） 731部隊でペスト患者多数を解剖
- 米占領軍： 731部隊の資料を押収。原爆被害調査の協力とも引き換えに、責任を問わなかった
(NHK世紀の映像プレミアム「科学者たちの罪と勇気」2018.12など多数)

「戦争」観」の変化：戦争についての感覚は大きく変わった

「戦争は国の利益に必要」から、「戦争は悲惨」へ

ヨーロッパ： 第一次大戦の大量殺戮兵器と悲惨さが大きく影響
日本： 大都市爆撃、原爆など第二次大戦で大きく変化
米国： 原水爆の開発競争、ベトナム戦争が大きく影響

【夏目漱石】 国家的道德というものは個人的道德に比べると、ずっと団が低いように見える。……詐欺をやる、誤魔化しをやる、ペテンに掛ける……。 (「私の個人主義」)

【石原 純】 国家にとって国防の重要は云うまでもないが…この頃口にのぼる国防国家とは果していかなる国家をさすのか……。 (『改造』1937)

【仁科芳雄】 科学は一体となって大進軍を起こさねばならない…科学者は時局を認識せよ。 (『知性』1941.4)

【仁科芳雄】 (カリフォルニア大学の雰囲気に触れ) 学者の間の多くの人たちは、非常に自由なる考えをもって、戦争のための研究には携わりたくないという考えが多いのであります。(日本学術会議での議論、1950)

気象学者・藤原咲平（1884-1950, 中央気象台台長）の場合

- ・「お天気博士」として知られた
- ・戦争における気象の重要性から積極的に軍に接近
- ・「風船爆弾」の開発研究、真珠湾攻撃時のハワイの気象
- ・「皇国の戦争」に熱狂、全気象台の職員も動員

【友人・阿部能成の言】

「藤原君の愛国心は相当素朴で・・・身命を棄てた軍人の行動に対しては、真に熱烈な感激と感謝を捧げて居た。
一夜或る宴席で、この戦争に反対で、さういふ世間の喧しくほめる行動にも感激の色を見せなかつた岩波茂雄の態度に、君がかなり激昂したのを見たこともある」

【戦後】

友人・岩波茂雄が言った通り間違った戦争をしていたと悟り、
激しく後悔、自分の不明を恥じた

「第九陸軍技術研究所の研究・開発に協力した科学者・技術者に関する一考察」
松野誠也 （明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報第3号 2017.09）

戦争と「学問の自由」について

① 科学研究の最大の目標は？

人類の多様な面での豊かで平和的な発展への寄与

② 「軍事研究の自由」も「学問の自由」か？

軍事研究は学問の自由を壊す：秘密性は軍事研究の性格で、科学研究の本質である公開性・透明性とあい容れない。

③ 防衛目的、基礎研究という区分はつけられるか？

区分はできないしするべきでない（『天文月報』特集記事も参照）
近現代のすべての戦争の名目は、「防衛」

今の日本は？

① 「安全保障」から「防衛」・「軍備」へ：急速な軍備復活

戦前復帰の「日本会議」＋国家神道を唱える「神社本庁」

② 戦前「国家総動員体制」と今の「産業総動員体制」

「大学改革」を文科省から内閣府の主導で実施へ？

③ トップダウン政策の蔓延の危うさ、報道への圧力

国境なき記者団の2017年「報道の自由度ランキング」で、日本は72位（G7中で最下位）

④ 研究費の大幅削減が続く今、大規模な軍事研究公募

私たち科学者には、戦前の軍国日本も合わせ、今の日本の政治状況を深く見て、考える責任がある

【配布資料】 2017年2月 共同通信配信 各地方紙に掲載

きょう

時評

あした

科学者・技術者は軍事や戦争に関わる研究を遠ざけるべきか、それとも一定条件内であればOK?

研究者たちには重い倫理的課題だ。科学・技術は人類の生活・発展に役立つが、使いようでは殺人や大量殺りくの道具にもなる。原爆が典型だが、現代では化学兵器やロボット兵器、情報兵器などさらに幅が広がった。こういう性格を持つ科学・技術の専門家たちには、研究成果の悪用を監視し阻止する責任がある。それは国際科学会議（ICSU）など科学者の世界的合意ともなっている。

戦後反省の機運

日本の研究者は、いまそれをまともにも問われている。直接のきっかけは一昨年に防衛設備の開発や生産・整備を担当する防衛装備庁が始めた公募研究「安全保障技術研究推進制度」

大学の軍事研究許されない

だ。

分かっていくがこの安全保障とは災害対策ではなく、軍備のこと。軍備を安全保障、戦闘を衝突とソフトに包みかえる技には要注意だ。この制度の予算は2015年度3億円、16年度は倍の6億円。いっぽう日本の大学の研究費は長年削られ続けてきた。研究者たちは、国際会議出席もままならない。飛びつくものが出ても無理もないと思える。そして、科学の研究をゆがめるという批判が噴出したのも当然だろう。

戦後すぐの1950年、日本の学術全分野の研究者を公的に代表する日本学術会議は、「戦争を目的とする科学の研究は絶対に行わない」と声明した。67年にも、「軍事目的のための研究は行わない」との声明を出している。戦争への深刻な反省に立った声明である。第2次世界大戦の惨禍を目にした研究者たちには反省の機運が高まったのは自然なことだった。

日本でも湯川秀樹など物理学者や文学者が先導したが、兵器開発に潤沢な研究費を得た工

学、生体実験を行った医学などの分野からの反省は、残念ながら薄かったのである。

多額の研究費を前に、反省の薄さが表面化した。15年度の応募は109件にのぼり、半分が大学からだった。採用9件のうち4件が東京工業大など大学研究者。中でも注目を浴びたのは、日本学術会議の大西会長が学長を務める豊橋技術科学大の研究が採用されたことである。当然、大学でも学術会議でも論議が沸き上がった。

巨額の予算計上

学術会議は、軍事研究問題の検討委員会を立ち上げた。さすがに16年度は6億円の予算に応募数は44件と激減した。だが驚くことに、17年度は110億円という巨額予算だ。

こういう状況のもと、2月4日、日本学術会議主催フォーラム「安全保障と学術の関係・日本学術会議の立場」が開催された。検討の結果を中間報告としてまとめ、公開討議にかけたのである。私も出席した。参加者は一部市民も含めて会場ぎっし



かifu・のりお氏 1943年生まれ。理学博士。天文学者。国立天文台教授、同台長、放送大学教授、日本学術会議会員、国際天文学連合会長などを歴任。現在、国立天文台名誉教授。文学や科学一般にも造詣が深い。著書に『世界を知る101冊』（岩波書店）など。

国立天文台名誉教授 海部 宣男

りの340人。報道陣も詰めかけ、真剣さがあふれる会だった。主要新聞が報道したように講演者のほとんど、会場からの発言の全部が、軍事関係組織の研究費を特に大学研究者は受けるべきでないという意見だったことは注目される。私も発言を用意していたが、熱い討論を聞いているうち時間切れになった。議論された中から以下の4点を特挙しておきたい。

①科学研究の最大の目標は、人類の平和的発展に寄与することである。

②秘密性は軍事研究の性格で、結果の公開・透明性を本質とする科学研究とは相いれない。

③防衛目的だからOK、基礎研究ならよいという意見もあるが、防衛も基礎も攻撃目的や軍事応用に切れ目なくなつてくる。

④大学は教育機関でもあり、

大学院生など若手研究者がグループとして取り込まれる場でもある。

試される倫理観

新潟大など軍事研究は受け入れないという方針をすでに決定した大学や、議論中の大学も多い。しかし多くの大学は、学術会議の結論を今後のガイドラインとすべく、心待ちにしている。

学術会議が現状を踏まえて二つの声明を再確認し、軍事組織からの研究費の受け入れを明確に否定できるか。合意が得られた中間報告を、しっかりとめ切れるか。日本の大学・研究者コミュニティの倫理が、試されている。さらに研究者たちのこの議論が、先進的な平和憲法を持つ日本の将来へ一つの礎石となることを期待したい。